

Report on the Village in Shanxi Province (2) : D Village of P County in July 2010

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27756

山西省農村調査報告(2)

—— 2010年7月、P県の農村 ——

行龍・郝平など
(弁納才一訳)

はじめに

本稿は、山西大学中国社会史研究中心が2010年7月に実施した山西省P県D村聞き取り調査報告の中国語から日本語への抄訳である¹⁾。

なお、本稿では、前稿と同様に、プライバシーの保護を考慮して村民の実名は極力ふせることにした(人名の表記にあたっては、例えば、毛沢東[Mao ZeDong]の場合はMZDとする)。また、原文に掲載されていた写真は全て省略した。

I 行龍・郝平・張永平による聞き取り

(1) WZX・WXW・MWB

聞き取り日時：2010年7月23日午後

聞き取り場所：WZX宅(頭道街62号)

宗教と伝統的な祝祭日

- ・元々、本村には中寺・后寺・小寺(尼寺)・老爺廟(関帝廟)・西廟・金堂廟(観音廟)などの寺廟があり、老爺廟と金堂廟は現存しているが、その他の寺廟はみな廃棄された。
- ・清明節には墓参りをする。これは集団化の時期や文革時期にも断絶することはなかった。現在の墳墓は基本的には全て土地改革の時に分配され

た自分の土地に安置されている。墓参は一般的に午前中に集中し、一族の成年男子が兄弟不和であっても一緒に墓前に進み、また、一緒に墓前から退かなければならない。こうして、一族の団結と親睦を示す。最近では、男子だけではなく、女子も墓参することができるようになった。墓前への供え物は料理・酒・果物・紙銭・饅頭などである。墓参の順序は、線香に火をつけ、紙銭を焼き、地面に頭を打ちつけて礼をした後、墳墓をきれいに掃除し、墳墓の周囲の雑草を取り除き、墳墓の上に新しい土をのせて、最後に供え物を置き、墓前から退く前に墓前の木に数珠繫ぎになった紙を掛け、すでに墓参りしたことを表す。

- ・端午節には、それぞれの家が粽を作り、門前にヨモギを掛け、子供は「五彩線」を縄でつなぎ、朝、黄酒を飲み、目・耳・鼻に黄酒を付けて厄払いをする。
- ・「入伏」には餃子を食す、木の葉を水に浸して体を擦って洗い、暑気あたりを防止する。
- ・7月15日と10月1日は鬼節とも呼ばれ、この2日間は決して墳墓には行かず、自分の家の門で祖先のために祈りの言葉をつぶやきながら紙銭を焼き、祖先にお金を持って行ってもらう。燃え尽きた紙銭のあたりに円を描いて他人がお金を持ち去るのを防ぐ。
- ・中秋節には、各家庭で月餅を作るが、1つの大きな月餅は「団圓」(一家団欒)とも呼ばれ、晩に月が出るのを待って「老天爺」に供える。
- ・冬至は村の中では「鬼過年」とも呼ばれ、それぞれの家で餃子を食す。
- ・「臘八」(冬至後第三の戌の日に行う祭)には、早朝、日の出前に「臘八粥」を食す。食材は粟・紅棗・豆である。
- ・「臘月二十三」(12月23日)は竈王爺(竈の神様)が天に登る(一家の過去一年間の善し悪しを玉皇大帝に報告する)日であり、村では「過小年」とも呼び、水飴を食す。
- ・「年三十」(12月30日)には春聯(新年に家の門や入り口の戸に貼るめでたい対句を書いた対聯)を貼り、宝紙を掛ける。昼の12時にお供えを準備し、自分の先祖の位牌にお出まし願って、その後に爆竹をならす。村では「請神」と呼んでいる。1月5日の午後に先祖の位牌を片付けて、その後に爆竹をならす。「送神」とも呼んでいる。

- ・「正月初二」(1月2日)は嫁いだ女性が実家に帰って来る日である。
- ・「正月十五」(1月15日)には「早船」・高跷(竹馬のようなものを両足に縛り付けて背丈を高くして踊り歩く民芸)・「背棍」・推車(一輪車推し)などで大騒ぎする。まず村の中を歩き回り、村民の家の中で大騒ぎをし、県城内の上演にも参加する。
- ・本村には7つの雑姓社、3つのW姓社、1つのT姓社があり、年越しの時に娯楽演芸をやって十王爺(閻魔大王)に奉納する。1月1日から15日まで、社が賭場を開いて村民の娯楽に供し、社首がお金を徴収して社の正常な費用にあてる。

農業生産

- ・2月になると、用水路や土手の修理と地ならしを始める。清明節の頃に汾河から水を引いて農地を灌漑する。

(2) WZ

聞き取り日時：2010年7月25日午前

聞き取り場所：WZ宅

WZの個人史と家族

- ・1930年10月29日生まれ(午年)で、80歳になった。
- ・私の父親は2度結婚し、最初の妻は2人の男子を産み、2番目の妻は4人の男子と3人の女子を産んだが、そのうちの2人の男子を養子に出し、3人の女子はみな童養媳として売られた(年齢は一番上でも11歳だった)。
- ・土地改革の時、私の家は4人家族で、17畝の土地を分配された。
- ・兄弟分の契りを結んだJHD, CCF, JSK, WZ, WD, WKJ, LYG, WZX, WDQ, WXW, LPC, WZW, WJC(下線部の者は今も健在)の13人が本村で最初の互助組を組織し、JSKが組長となり、私は技術員だった。
- ・1958年はもともとは豊作だったが、大量の労働力が土法製鉄に動員されたので、農作業をやる(収穫する)者がいなくなった。
- ・1960年に本村では108人の死者を出したが、その大部分は身体がむくむ急

性腎臓炎だった。その中には幼名が柱子という「釘鞋」(補強のために靴の裏に釘を打つ)の職人がいて、人々は彼のひととなりか誠実だったので、彼を倉庫の看守にしたが、結果的には彼は餓死してしまった。私は食事の時間になっても食堂にいて食事をしなかったの、食堂ではお腹いっぱい食べることができず、畑で農作物をこっそり食べた。当時は、畑の農作物をこっそり食べる人は多かった。

- ・私はかつて民兵の分隊長を務めていたが、民兵武装部は三道街のW家祠堂に設けられた。

四清工作隊

- ・四清工作隊は20人余りで、隊長はPYJ、副隊長はFWX、指導員はWSX、隊員の大多数は山西医学院から来ていた。彼等は村民と寝食を共にし、一緒に働いた。主に幹部の汚職の審査や倉庫・帳簿の点検を行った。

王家祠堂

- ・本村には3つのW家祠堂があり、三道街の古い祠堂に祀られているのはW家の第1代から第7代までで、第1代はWSGである。頭道街のW家祠堂は第8代から始まる。現在、本村のW家の最年長者は第20代で、WHは82歳で、最年少の者は第27代である。私も第20代で、年齢ではWHに次いでいる。

II 李嘎・郝麗娟による聞き取り

(1) HRS(1944年生まれ、申年、67歳)

聞き取り日時：2010年7月23日 9:40～・午後

聞き取り場所：HRS宅・沙河

整理：李嘎

家族の状況

- ・本村のH姓の大部分は隣のH村から移り住んだもので、私の一族は70～80

年前にH村からやってきた。

解放前の灌漑事情

- ・解放前、本村の土地は汾河の水を用いて灌漑し、本村の土地は頭道堰・二道堰・三道堰の3つの堰によって分けられていた。第一の部分の土地の灌漑が終わると、頭道堰を閉じて、次に第二部分の土地の灌漑を始め、この部分の灌漑が終わると、二道堰を閉じ、最後に第三部分の土地の灌漑を行った。村の西部の水田は地勢が最も高く、汾河の水を引き込むすべがないので、この部分の土地は井戸水で灌漑を行った。全村の灌漑用の井戸は20～30ある。解放後、本村は汾東灌区に属するようになった。

1977年の洪水

- ・1977年の洪水は非常にひどかった。当時、村の北部半分が水に浸かり、この地区の村民が暫時、村の南部へ避難した。当時、長時間にわたって大雨が降ったので、本村の近くの小さなダムが決壊した。
- ・当時は、主に俵で水を堰き止め、ディーゼルエンジンで排水をした。以前、本村には四川省からの移住者が十数戸あったが、「抗洪英雄」のRCYもその中の1人だった。
- ・水が引いた後に、護村堰が作られた。老人たちの話によると、本村の護村堰は、水害がひどかった1933年に作られたもので、その時の水害は1977年よりもさらにひどかったという。1977年の護村堰の発起人はWRE、彼の実家は本村だったが、P県城内で製粉工場と電灯会社を経営していた。文革中、彼は闘争にかけられて財産を没収され、最後は本村に戻ってきたが、彼の子孫は現在みな県城内に住んでいる。護村堰の材料は全て土で、当時、庶民には食べるものがなかったので、堰の修築に本村民を採用してP県で生産された餅子を提供した。

沙河の治水工事

- ・沙河は自然の河川ではなく、人工的な河川である。1977年における沙河の治水工事の目的は水を引かせ、アルカリ度を下げることであり、県水利局の統

一的指導の下に行われた。この工事は、大規模で、2～3年続いた。

- ・当時、第4小隊(隊長はMRR)のWCYは、他人に白い対聯を貼った。当時の隊長は祝い事に他人に白い対聯を貼った。当時、この事件(WCY事件)は影響が非常に大きかった。WCYは以前はP県城内に住んでいたが、履歴がよくなかったので、1962年に本村に追い返された。本人は不幸だと感じ、毎日、悶々として過ごしていた。現在、まだ生きており、50歳余りになった。

農業生産と治水

- ・私の家は11畝の土地を耕し、主に玉蜀黍を栽培している。旧暦4月に播種し、8月15日頃に収穫する。現在、本村の玉蜀黍の平均生産量は1畝当たり約1,000斤だが、汾河の水で灌漑している本村北部は1畝当たり1,300～1,400斤で、汾河の水で灌漑することができない本村の東部と西部は1畝当たり1,100～1,200斤で、本村南部はH村と接しており、農地がない。
- ・集団化時期の食糧生産量が1畝当たり300～400斤と低かったのは品種が良くなかったことに大きな原因がある。現在は、品種が良くなり、生産量が上昇したが、これは沙河の治水工事によって水が引き、アルカリ度が下がったことが決して決定的な要因ではない。近年、地下水の水位が下がってアルカリ度が自然に下がった。以前は1メートルも掘れば水が出たが、現在は3メートル掘っても水が出ない。

土塩の生産

- ・かつて本村には土塩を作る家が多数いて、1950～60年代にも存続していたが、当時は生産隊に属していた。以前、土塩を作ることができた人は、現在、みな死んでしまった。P県の牛肉がおいしい重要な理由は、当時、土塩を用いて作っていたからである。

沙河の踏査

- ・沙河は本村から1里余り離れている。現在、沙河の水質汚染はかなり深

刻だが、かろうじて灌漑に利用することができ、実際、少数の村民は灌漑に利用している。

・沙河から本村へ戻る途中に旧護村堰があり、その傍らに3つの石碑がある。

(2) MRRなど

聞き取り日時：2010年7月23日 17：50～

聞き取り場所：MRR宅

聞き取り対象者：MRR, 妻(78歳), 5男のMGC(44歳), HRS

整 理：李嘎

MRRの家族

・私には5人の息子がいる。長男は太谷で仕事をしていたが、すでに退職した。次男は本村で農業をやっている。3男は陽泉探鉱で働いている。

4男は亡くなった。5男のMGCは私たち夫婦と一緒に暮らし、農業をやっている。本村のM姓は35戸で、一族だが、家譜はない。現在住んでいる家は建ててから40年余り経った。

MRRの個人史

・私は字が読めない。1962年から集団化が終わるまでずっと生産隊長を努めた。そのうち、最後の4年間は第4小隊長だった。それまでは第7小隊長だった。各生産小隊には300人余りに社員がいた。当時、第7小隊は主要には農業に従事し、副業は少なかったが、1970年代には第7小隊だけがトラクターを所有するようになった。第4小隊に異動してからは、本村で唯一養鶏業(数百羽)を行う生産隊となった。

集団化時期の農業

・集団化時期に主に栽培したのは玉蜀黍・高粱・粟・棉花で、小麦も植えたが少なかった。当時、汾河の水による農地の灌漑にかかわる水費(1畝につき1元)は集団が支出していた。当時の1畝当たりの生産量は、玉蜀黍が200～300斤、高粱・粟が100～200斤だったが、現在は、品種改良に

よって玉蜀黍が1,000斤以上となっている。集団化時期と同じく現在も農産物の収穫が畜力と人力で行われているのは、機械化すると非常に浪費するからである。例えば、1畝当たり1,000斤の玉蜀黍を収穫することができるかとなると、機械による収穫では200斤が浪費される。

1977年の洪水

- ・当時、たしかに任成義という人間がいたが、泳いで流れを下って単に溺死しなかっただけで、何も決して義を見て勇敢にやったわけではないと聞いている。当時、私(MRR)も「抗洪先進人物」で、後に県城内で表彰されたが、本村で「抗洪」によって県城内で表彰された人は決して多くはなく、数人だけだった。
- ・県は沙河水利工事の指揮部を私の家の近くに設立し、P県水利局のM局長が陣頭指揮を執った。1977年秋に工事が始まり、少なくとも半年は工事が続けられた。私はかつて沙河の修築工事に参加した後、大寨へ行って半月学習した。

本村民の生活用水

- ・以前、本村では井戸水を飲んでいて、本村には10余りの井戸があったが、現在は全てなくなった。2～3年前から水道水を飲むようになった。

土塩の生産

- ・以前、第8小隊・第9小隊・第10小隊で土塩を生産する人が多かった。

(3) HSX(申年, 79歳)

聞き取り日時：2010年7月24日 16:05～

聞き取り場所：HSX宅

整理：李嘎

HSXの個人史と家族

- ・私の実家はこの近くにある。本村にはH姓は決して多くない。18歳の時、

TZRに嫁いだが、TZRは1976年に病死した。私には4人の息子と2人の娘がいる。長男(TRM)は1963年生まれの卯年で、農業をやっており、その妻は本村人のW姓である。次男(TXM)は午年で40歳過ぎて、農業をやっており、その妻はH村の出身である。3男(TYM)は申年で、夫が亡くなって私1人では養えなくなったので、私のおじの家で養ってもらい、3男の妻は甘肅省蘭州の出身である。4男(TQM)は子年で30歳過ぎて、その妻はJ家堡の出身である。長女(TXL)は申年で50歳を過ぎており、本村のW姓に嫁いだが、一家は太原で仕事をしている。次女(TXY)も私のおじに養ってもらったが、子年の51歳で、その夫は河南省の人である。

- ・T家街のT家祠堂は1960年代に壊された。T家街のT姓にはカトリック信者はいない。

(4) TCC(辰年, 59歳)

聞き取り日時：2010年7月24日17:00～

聞き取り場所：TCC宅(茂盛街23号)

整 理：李嘎

TCCの家族

- ・私は離婚して10部屋ある家に1人で住んでいる。子供は1男1女である。息子(TXY)は山西省の晋劇院で働いており、本年2010年3月に28歳で洪洞県人と結婚した。娘(TXH, 25歳)は数年前に本村から50～60里離れたところに嫁いで、すでに子供を産んだ。息子は初級中学を卒業した後、演劇を学び、その後、省晋劇院へ行った。
- ・私には7人の兄弟がいる。1番上がTYC(71歳)で、本村で農業をやり、乳牛を飼っており、3人の娘と2人の息子がいる。2番目がTFC(68歳)で、榆次の晋劇院で働いていたが、現在は退職し、3人の娘と1人の息子がいる。3番目はTGC(65歳)で、もともとは晋劇院で働いていたが、後に榆次の工場に転職し、現在は退職し、2人の息子がおり、2人とも博士で、出国し、30歳を過ぎたが、結婚はしていない。4番目は小さい頃に親戚に預けられた。5番目が私である。6番目はTYC(55歳)で、榆次の電気

機械工場で働いており、2人の娘と1人の息子がいる。7番目がTBC(50歳過ぎ)で、呂梁晋劇院で働いていたが、すでに退職し、2人の娘がいる。4人の兄弟が晋劇を演じるのは全て父親が教えたからである。解放前、父親は個人の劇団で晋劇を演じて生計を立てていた。

生計

- ・現在、私は15畝の土地に玉蜀黍を栽培し、8頭の乳牛を飼育し、そのうちの5頭から牛乳を搾ることができる。一般的に、乳牛は2年半で牛乳を搾ることができるようになるが、年齢が高くなるにつれて搾乳量は減少する。本村には搾乳機を備えた搾乳所が2カ所ある。平均して1頭の乳牛から年間1,000～2,000元の純利益が上がる。玉蜀黍を飼料として用いているが、15畝の土地から収穫できる玉蜀黍の量では8頭分の飼料には足りないので、不足分を購入している。

畜産業

- ・本村の全戸数約930戸のうち約50戸が乳牛を飼育しており、飼育数は一般的には1～2頭だが、4～5戸が8～9頭を飼育し、最多の家(SJS)は10頭である。
- ・本村西部に約500羽の鶏を飼育している家がある。養豚農家は20～30戸おり、一般的に3～5匹を飼育しているが、本村西北部に数百匹の豚を飼育している家もある。羊を飼育している家も数戸おり、教会の近くに住んでいるWPYは50匹近くの羊を飼育している。また、同じく教会の近くに多くの狐、狸、貂を飼育している家もある。

1977年の大洪水

- ・当時、床上浸水した家屋の老人を担いで老爺廟(当時は学校だった)へ避難させ、学校は休校にした。県から救済用の乾燥食糧が贈られてきたが、主にビスケットだった。

集団化時代の「学習班」

- ・母は他人の玉蜀黍を盗んだので、「学習班」に行ったが、私が自ら進んで

「学習班」に行ったのは幹部と意見が合わなかったからである。

(5) LPZ(卯年, 72歳)

聞き取り日時：2010年7月25日～

聞き取り場所：LPZ宅

整 理：李嘎

村の区画と転居

- ・ 民国時期、本村の権力機関は村公所で、その下に閭が置かれていた。当時、本村には8つの閭があったが、土地改革後は生産隊に改編された。
- ・ 三道街に住んでいて第7小隊に属していたが、10年前に二道街に転居した。

Ⅲ 常利兵・高維娜・李嘎・郝麗娟による聞き取り

(1) JST(1930年生まれ, 81歳)

聞き取り日時：2010年7月24日 10:30～

聞き取り場所：JST宅

整 理：李嘎

1933年の大洪水と護村堰

- ・ 1933年に汾河が氾濫し、陸(甲)街とT家街が全て浸水した。当時、現在住んでいるところの水深は1メートル余りとなった。本村の護村堰はその時の大洪水の時に本村の村長だったLXKが指揮して修築したものだと聞いている。

抗日戦争時期の状況

- ・ 日本兵が八路軍を探すために本村にやって来て、物を奪ったり、家屋を焼き払ったりした。当時、本村内には多くの柳の木があったが、全て日本兵よって切りはらわれて、靈石県富家灘にあった炭鉱の坑道のつかえ棒として使われた。富家灘あたりには万人坑があると聞いている。昼

は日本兵が来て、夜は閩錫山軍や八路軍が来た。

建国前の本村の状態

- ・当時、本村では商売をする者が多く、彼等は大きな家屋を建てていた。現在、LCZが住んでいる家屋は、私が5～6歳の時にLCZの叔父が建てたものである。

JSTの家族と個人史

- ・私の祖父(JDZ)は1966年生まれで、農民だったが、気性が強く心がまっすぐだったので、村で長年にわたって調停役を務め、「小包公」と呼ばれていた。村にやって来た閩錫山軍は二道街に住み着いて「編村運動」をやっている、「為乱」分子を捜して村民を殴り殺していた。祖父は1947年に井戸に身を投げて死んだ。閩錫山軍はいつも祖父に「お前の孫は戻ってきたか、はやく戻らせろ」(私の兄はゲリラ隊員だった)と言っていた。祖父は彼等に殴り殺されるのを恐れて井戸に身を投げて死んだ。
- ・父親(JSX)は1893年生まれである。私は3人兄弟で、10歳年上の兄(JSX)はゲリラ隊で、いつも戦いのことを話していたが、1947年に戦闘で犠牲になった。弟(JSZ)は1936年生まれである。また、6歳年上の姉(JSY)は死去し、3歳年下の妹(JSF、1933年生まれ)は78歳になった。解放前、父親は寧夏銀川で商売をしていたので、私は1946年に父について行って寧夏銀川の中学校に6年生から編入学し、1950年に卒業して本村に戻り、父も同年に私より先に驢馬と騾馬を引き連れて本村に戻っていた。本村では1949年に土地改革が始まったが、私の家は貧農に区分された。
- ・私は1951年12月に近くのB村出身の妻と結婚した。当時は、妻の実家には20万余元りと2～3着の紅袄(興入れの時、新婦が着用する衣服)を贈ることになっていた。
- ・建国初期、本村の小学校は老爺廟の側にあり、当時の児童は70～80人だった。私は建国後に農作業に従事したが、その後、教師になったものの、教えるには知識が足りないと感じ、途中、平定県で勉強し、さらに、後に孝義県で17年間、秘書工作長を努めた。

付近の村の状況と廟会

- ・以前、H村は本村に属する自然村で、「道備里」と呼ばれていたが、後にH姓とG姓がそれぞれ拳人を輩出したので、H村と改められた。
- ・解放前、本村民は廟会に出かけて物を買っていた。最も遠いのが本村から10里余り離れているW県徐家鎮の廟会(会期は12月25日で、主に正月用の品物を買う)で、本村から20里余り離れているB村にも廟会があった。それぞれ1月25日はX村、3月7日はW家庄、4月5日は本村で廟会があった。

その他

- ・JSTは2008年秋に『J族家譜』を作成していた(家譜の翻訳は省略した)。

IV 馬維強・李保燕による聞き取り

(1) JSL(丑年, 74歳)

聞き取り日時：2010年7月23日 9:46~11:30・16:37~19:30

聞き取り場所：JSL宅

JSLの個人史

- ・学校には1ヶ月余りしか行ってない。11歳の時、父が亡くなり、家には14畝の土地の他に母と働くことができなかつた兄の3人だけが残され、私は17歳まで労働に参加した。
- ・1957年に入団し、元の団支部書記が公社へ異動したので、1年後に本村団支部書記と本村突撃隊隊長を1960年まで兼務し、1960年10月10日に黨員になった。
- ・1960年、本村の副支部書記となり、主に学校・衛生・「民政調解」・保健・「治保」・会計・保管を管理した。三年間の困難な時期、省と県が支援をして病号食堂を開設したが、私がこれを管理することになり、この工作期間中に後に妻となる霍玉蓮と知り合った。
- ・四清運動が始まると、主に幹部の多く食べて多くを独り占めした問題が

調査され、私は本村の会計・保管を管理していて、210元分を多く飲み食いして独り占めにしたので、工作隊に対して問題をはっきりと説明した。当時は、飲み食いが2,000元以上に達すると問題のある幹部というレッテルを貼られた。

- ・1967年、革命委員会主任となった。当時、2つの派閥があり、当初、私は「総司」派を養護し、後に「聯絡站」派が私を取り込もうとしたが、正式には参加せず、生産に力を入れることを提起した。1年後、革命委員会主任を辞職してトラクターを運転した。
- ・1969年、村長となり、以前どおり突撃隊を指揮し、学校を管理した。
- ・1978年、四人組に対する審査が行われた。私は当初は「総司」派だったが、後に「聯絡站」派に参加したので、投機分子と見なされ、また、奪権闘争にも参加したことがあったので、四人組と判定された。県に義兄弟の契りを結んだ梁秀才がいたので、私は人民公社の「農機站」に転勤させられ、1年目は站長となり、2年目は小徐工作隊で仕事をした。1981～82年、本村で参謀となった。
- ・現在、本村で档案室・衛生・学校を管理し、「会計保管」を務めている。

結婚と家庭

- ・妻(HYL, 午年, 78歳)は専業主婦で、実家は本村の二道街にあり、以前は商売をしていたが、解放後は集団化してだめになった。
- ・HYLは団員で、「病号」(病人)の世話をしていたが、3年間の困難な時期、私は病号食堂と一緒に仕事をした。私は貧農出身で、HYLは中農出身だった。
- ・1962年春に婚約し、同年秋に結婚した。婚約の宴席で食べることができた料理は、豆腐・もやし・団子・焼き肉の4皿だった。また、結婚式には400戸(500人)以上が出席し、省・県・公社の幹部と本村の親戚・友人が参加した。500人分の食べ物はかなり量の量で、しかも、当時は、統購統銷(統一購入統一販売)政策が実施されており、お金があっても物を買うことができなかったので、生産大隊と個人から前借りした。
- ・子供は3男1女で、1963年生まれの子長男(JZQ)は貨物積み卸し労働者で、

1964年生まれの子男(JZL)は商売をし、1966年生まれの子娘(JXH)は辛庄に嫁ぎ、1968年生まれの子男(JZG)は民族画家として自分の店を持っている。

突撃隊

- ・突撃隊は団員の中から有能な人間を選抜して組織された。1958年、私が本村団支部書記兼突撃隊隊長となった時、12人の有能な団員と突撃隊を組織し、農地で科学的な試験をした。当時、突撃隊には22畝の土地があつて高粱を栽培していたが、生産量はあまり高くなかつた。それは主に肥料に原因があつた。試験と改良によって、翌1959年には、全村6,200畝余りの土地で120万斤余りの生産量(1畝当たり約200斤)だつたのに対して、突撃隊の20畝の土地で7,000金余りの生産量(1畝当たり約350斤)があつた。このような業績によって、本村の娘婿のTYの紹介で1960年10月10日に黨員になることができた。

3年間の困難な時期

- ・1958年、大躍進運動が始まり、本村支部書記のTKYが水増し報告をし、1960~61年には207人の死者を出した。TYが本村の死者と病人の状況を省委員会に報告し、省委員会が本村の死者状況を調査し始め、地区委員会に状況の事実確認をさせた。こうして、地区財貿部のD部長と地区商業局のL局長、さらにY・H・Lの3つの科の科長が5人小組を組織して、群衆の中に入っていつて状況を調査し、省委員会に報告した。省委員会は、P県書記のRJF、県主任のTZS、本村書記のTKYを悪人とする一方で、本村に対する人的・物的支援を開始した。これを受けて、P県商業局のGSR局長、地区財貿部のD部長、本村副書記だつた私の3人が共同で食堂・生活・病人の管理を開始した。1960~61年、病号食堂には国家から豆乳粉と豆乳が補給された。当時、支給された食糧は、一般人が毎日8両(1両は50グラム)、病人が1斤2両(1斤は16両)だつた。D部長は工作人員も一般人と同じ量を食べるように命令し、違反して多く食べた場合は処分するという通達を出した。P県商業局の副局長はこの命令に違反してたくさんの窩窩頭を隠し持っていたので罷免された。

- ・私の統計によれば、当時の死者207人中、60歳以上が150人余り、60歳以下が50人余りだった。また、死者の中には商売をしていた人が多かった。というのは金があっても食べ物を買うことができなかつたからである。

四清運動

- ・四清運動の前に、会社の副主任と私は村の中ですでに経済・汚職・食糧の溜め込みに対する「三清」をやっていた。これに政治と歴史を加えて「四清」となる。四清運動の時、霊石県工作隊20人(男女ほぼ同数、大部分が山西医学院)が本村にやって来て、各单位と小隊(各小隊に平均2人)に編入された。彼等は大隊や一般家庭で食事をした。
- ・本村の四清運動は主要には幹部の「多喫多占」問題に対するものだった。1日の食糧は1斤2両と規定されていたが、何人かの幹部は約2斤食べていた。当時、私は会計・保管を主管していたので、大隊の帳簿への記載をごまかすように求めてくる幹部もいた。
- ・四清運動が始まると、朝から晩まで「洗手洗澡」の会議を開催し、主に村の中で群衆を集めてきて検査をし、群衆がよろしいと言えれば終わる。私は群衆の中で最初に「洗手洗澡」をした幹部で、当時は、本村南部の塘場大槐樹の下で審査が行われた。余分に飲み食いした210元分を返済するために、自分の自転車と妻が実家から持ってきた金の指輪を売ったが、わずかに70元にしかならなかつた。工作隊が掛け売りを検討してからは私はゆっくりと返済し、ついに審査に合格できた。当時、WXRは保衛だったが、いつも人を縛ったり、吊したり、殴ったりしていた。
- ・TGFは四清運動の積極分子で、何度も偽の判子を作って偽の証明書を作り、人を陥れ、工作隊や公社に告げ口をしていた。だが、四清運動が収束しようとしていた時、劣悪分子のレッテルを貼られた。また、LNと二狗子は重点的に養成された積極分子で、いつも群衆の意見をまとめて工作隊に伝達し、その工作に協力していた。さらに、二禿子の妻も積極分子で、幹部を非難した。当時、WXRが審査に合格できなかったのはこのような人間がいたからである。彼等は、四清工作隊隊長のPYLがWXRの母親の家で長期間にわたって食事をし、W家でおいしいものを飲み食いし

たので、WXRをかばっているのだと考えていた。

宣伝隊

- ・1964～65年、本村の毛沢東思想宣伝隊は全部で40～50人いて、団員は必ず参加しなければならなかった。宣伝隊隊長は団支部書記のWJHで、政治にずぬけていて、毛沢東の著書を学習していた。
- ・この他に、本村には業余宣伝隊があり、主に大寨に学び、政治上で模範的な人物を宣伝していた。生産の時は小隊に戻り、何か事があれば突撃し、決して生産に影響を与えなかった。村外にまで宣伝に行ったこともあった。滅私奉公の精神を宣伝した。

文革期の状況

- ・1967年、私は革命委員会主任になって間もなく、本村には「総司」派と「聯連站」派が成立した。P「戯班」が突撃隊に教えに来て、P「劇団」の人がみな「聯連站」派だったので、私を「聯連站」派に動員しようとした。私は臨時革命委員会の成立と生産を高めることを提起し、1年で革命委員会主任を辞職し、後任にはWXRが当たった。
- ・当時、「総司」派の責任者はWDで、「聯連站」派の責任者はWJZだった。2人とも本村の間人で、もともと宣伝隊の隊員で、私が養成した党員だったので、県の武闘には参加したことがあったが、私が提起した生産を高める政策に応じて村内では武闘をしなかった。全体的に見て、P県は「総司」派が多かった。
- ・1969年、私は村長になり、学校を管理し、優秀な学生を選抜して後継者を養成した。WYKという気に入った学生を学校が休暇になると科研隊へ行かせて労働させ、幹部になるように求めた。後に、彼は公社に異動になり、師範大学に進学したが、彼は労働者ではなく、農民になりたいと希望したので、1976年、県委員会の歓迎を受けて本村に戻ってきた。彼は若いので、雑誌『紅旗』を多く読み、いつも張春橋の文章のことを話していた。しばらくして、県が彼を支部書記にしようと考え、WXRは彼が就任するのを恐れて、1977年の4人組審査の時、地区工作隊と結託

して彼を4人組であるとして陥れた。

荒れ地の開墾

- ・集団化時期、本村には7,200畝の土地があったが、そのうちの100畝は荒れ地だった。1963年、荒れ地を開墾することが提起され、私が村を代表して上級政府と交渉し、公社は批准したが、県は同意しなかった。村に戻ってきてから、私は密かに県の意見を聞かないを決定し、村民委員会を招集して上級政府はみな同意したと告げ、荒れ地を分配した。荒れ地を開墾し、群衆が自留地と湿辺地を持つようになったので、1964年には食糧不足の問題が解決した。

副業

- ・塩化カリウムの生成はTYが提出した副業で、草木灰を利用して生成し、国家に売ったが、かなり利益があった。近隣村まで原料の高梁がらや玉蜀黍がらを買に行った。
- ・社会主義をやっていた頃は、集団で製粉や豆腐・酢・酒作りをしていて、その残滓は養豚の飼料となった。大隊では集団で500匹の母蓋を飼育し、子豚をみんなに分配し、個人では主に豚を飼育して豚肉を売った。
- ・本村は6,000畝の土地のうちの4,000畝がアルカリ地なので、解放前にはアルカリ土を利用して製塩する規模が大きかった。精製した塩は楡次や太原に販売された。後にアルカリを除去する土壌改良が進み、現在ではアルカリ地が1畝もなくなってしまった。
- ・運輸隊が集団で村の7台の車を利用して、毎年冬季、太原の棉毛廠まで運送した(何を輸送したかは不明だが、原棉の可能性が高い—訳者)。
- ・当時、国家の政策で無利子で6,000元を借りることができ、1台の耕耘機を購入することができた。本村では、個人的な関係があったので、国家から無利子で8,000元を借りることができ、これに大隊から出した2,000元を加えて、1万円を買い集めた。これで耕耘機を1台(1日で200畝余りの土地を耕すことができた)購入した。この耕耘機で近隣のW站・D村・X村・W家庄などで耕し、1畝につき0.5~0.6元を稼いだ。

- ・2,000円で綿繰機(1昼夜で1万斤の綿繰りができた)を1台購入した。日中は村外(7~8ヶ村)で綿繰りをし、夜は本村で綿繰りをした。1斤で0.03元の利益があった。
- ・本村では4台のトラクターを購入した。

出身階級と結婚

- ・本村では地主や富農の子供も宣伝隊に参加した。また、本村では地主や富農本人とその子供の進学・参軍・結婚に大きな制限を加えたが、出身階級が悪いが結婚した者もいれば、逆に出身階級は良いのにやもめ暮らしをしている者もいる。
- ・地主のWYSの長男は結婚したが、子供が生まれなかったので、妻をX村に追い出した。その次男(幼名は二子)は教養があったが、出身階級の影響を受けて30歳を過ぎてようやく結婚した。その妻(父親は第一中学の校長)はもともと結婚したい相手がいたが、相手側の家が同意しなかったので、精神に錯乱を来たし、後に紹介によってWYSの次男と結婚した。改革開放後、W家の没収された家屋はこの次男に返還され、1男1女が生まれ、息子は北京で働いており、娘は大学を卒業した。
- ・LTYは出身階級はよくないが、二胡を弾き、自転車を修理することができ、人柄も頭も良く、その子供はみな結婚した。
- ・WYは地主階級出身だが、精華大学の教授で、解放後はソ連に行き、1970年代に退職して村に戻ってきた。その娘は1989年の動乱の時にイラクへ行った。WYは自分は革命的だが、娘は逆に動乱へ走ったと考えて、親子の縁を切った。

(2) JSL

聞き取り日時：2010年7月24日 10:02~11:30・16:03~19:30

聞き取り場所：JSL宅

三幹会と整党整風

- ・当時、三幹会すなわち整党整風は、主に中央政府の政策や路線に照らし

て村の中の路線を理解していない大隊及び小隊の幹部に焦点をあてて行われたものであり、年に1回開催された。整党整風は三幹会(県・公社・大隊の幹部からなる)と四幹会(県・公社・大隊・小隊の幹部からなる)の2つに分けられ、時間は少なくとも1週間で、長ければ半月にも及んだ。

- ・三幹会は一般的に秋の収穫後に招集され、問題があればその芽のうちに摘んだ責任者は人民公社の幹部で、彼等と我々の生産大隊幹部が普通は小学校の教室で討論・検討し、主に内情を探り、どんな問題があるかを考えた。1日目は開幕式で、政策を宣言するが、やり方は固定していない。具体的な問題を具体的に分析し、公社や県に招集される時もあった。主に汚職・腐敗、工作の誇張、こっそりと悪事を働くことなどの不正の作風を正し、農民に対して再教育を行った。もし、整風(誤った作風を正す)中に問題が発生したら、その場ですぐに審査をし、口頭で説明するか、自筆ないし代筆で文章にして拇印を押した。実に汚職が多く、工作态度もよくなく、警告処分にした。毎年秋に幹部を再選したが、警告処分を受けた幹部は往々にして落選した。
- ・三幹会で採用されたやり方は、点呼を取るか自分で報告し、審査が終わった後、生産大隊で討論し、過ちが正されたことを承認した。本村のWDは、こそこそやるなどして作風が良くなかったので、整風中に罪に問われた。政策を正しく理解することができなかつた幹部の中には怯えて自殺する者も少なくなかつた。例えば、T家堡の幹部だったTBYは整風に耐えきれず、河に飛び込んで自殺し、死後、党と民衆に反する罪に問われた。また、ある生産小隊の政治隊長は整風の度が過ぎて農薬を飲んで自殺を謀ったが、急いで救った。だが、死んでも白状しない者もいた。村主任のLTWは徹底した頑固派で、ある家族と刃傷沙汰に及んだことがある。
- ・「723布告」が頒布された後、法令によって武闘を禁じ、毎年1回、三幹会と四幹会を開催することを要求し、団結を増進しようとしたが、布告が出た後も派閥闘争があり、多くの国家の幹部が自殺した。

村政

- ・本村で最初の党員はTEHで、1956年に初代の書記になった。当時、本村

には7人の党員がいた。最初は思想上の認識が不十分で、しかも閻錫山がいつも党員を殺していたので、多くの人は入党しなかった。第2代書記はWFSで、1957年の1年務めた。第3代書記はWXYの妻(陝西省出身)で、3～4年務めたが、1958年の大躍進が気に入らなかったで、本人はやらなくなった。第4代書記はTKYで、当時はすでに16～17人の党員がいた。当時は入党すれば生産小隊の幹部になり、入党すれば、政治的覚悟が高く、正しいことをしなければならなかったが、1958～59年頃は入党して幹部になると、悪事を働いたので、やはり多くの人は入党しなかった。当時、TY・D部長・G局長が思想工作をしてくれたので、私は入党申請書を書き、10日後に批准されて正式の党員になった。

- ・本村の侯景華は元々商人で、出身階級は貧下中農で、1952年に入党し、良い人間だったが、党の仕事をやり遂げることができなかったので、1956年に自ら進んで党から脱退を願い出た。その時、郷政府が話を聞きに来たが、脱党の意志が堅かったので、同意せざるをえなかった。彼の坑道によって、多くの人が党の仕事をしたくないと考えるようになった。
- ・もちろん、本村にも過ちを犯して除名されて党を追い出された人がいた。TKYは、飲食の問題で、総額が約100元だったが、いつも誇張と不実が多く、群衆の生活に困難をもたらし、多くの人を餓死に至らしめた。そこで、D部長が救済するように命令を下し、党から追い出して行政職務を停止させた。WXHは、四清運動をやらず、誤った政治路線を歩んだ。まず、彼は地主のWFの娘に買収されて中農であるという証明書を書いてあげた。また、彼は他の幹部と分裂して単独行動を行い、工作隊を罵った。そのため、彼も党から追い出されて行政職務を停止させられたが、1979年に名誉と党籍を回復した。WHは、当時、支部副書記を務めたが、過去に問題があり(偽の派閥を形成)、また、いつも人を縛り上げ、殴ったり、吊したりしていたので、1958年に国民党のやり方だと判断されて除名されて党を追い出された。WFSは、書記をやったことがあったが、個人的な関係から盗難・窃盗をかばったので、党籍を剥奪された。SXは、副業を管理する村民委員会副主任だったが、四清運動をやらなかったことと汚職(当時、200元の汚職は500元を支払う処分となり、2,000元の汚

職というレッテルを貼られた)により、除名されて党を追い出されたが、1979年に名誉と党籍を回復した。

- ・ZMGは外来の幹部である。抗日戦争の時には、彼は南沙河花溝の工作員だったが、1948～49年に本村で土地改革を実施し、本村で部屋と土地を分配されて移り住むことになった。1969年に村民委員会の構成員になったが、本村の家庭事情を理解していなかったので、多くの家庭に関する資料が誤って記載され、レッテルを貼られた。WFの家もその一例である。1970年代にもHPFという党員が本村にやって来た。当時、幹部と群衆は不満を抱き、彼女を村から追い出したが、本村に親戚がいたので、本村に遷ってきた。

四清運動

- ・1965年、20人余りの四清工作隊がやってきた。四清運動中の階級区分は相対的なものだった。当時は、地主・富農・悪徳分子の子供でもただ思想的覚悟が高ければ入団・入党が許可され、レッテルを貼られた者の子供も宣伝隊に入隊することができた。本村ではカトリック信者の娘も入団した。ただし、問題がある者の子供は高校には進学できなかった。軍への入隊は制限を受けたが、具体的な状況を見て判断された。HLHは悪徳分子で、彼の弟が四清運動の時に彼を闘争にかけて境界をはっきりさせたので、後に入団し、軍にも入隊した。TCLの叔父はレッテルを貼られたが、当時、TCLは叔父の問題を摘発し、彼との境界をはっきりさせたので、後に入団し、人民公社の電話交換手になった。

下放青年

- ・本村には太原から2人(氏名不詳)と天津から1人(HGQ)の計3人の下放青年がいた。本村に親戚がいて、ある者は親戚の家に住み、ある者は農家に住んだ。彼等は生産小隊に編入され、本村には2年間いた。

カトリック信者

- ・汾陽で神父をしているFZCは、本村の出身で、17～18人の信者がいる。

その中の1人がTZKで(数年前まで太原で神父をしていた)、6カ国語ができ、イギリスに留学した後に北京に戻ってきて勉強し、布教活動で学生が不満を抱くようになったので、本村に戻ってきた。

歴史反革命分子

- ・本村には「歴史反革命」と判定された者が8人いた。その中の1人がTYK(故人)で、第二次国共内戦期に国民党党支部書記を務めていたので、本人は悪くないが、歴史反革命のレッテルを貼られたが、後に名誉を回復した。抗日戦争時期、TYKは501(名義上はカトリック信者だが、実際は地下政党)といっしょに住んでいて、501の身分が暴露されると、我々は互いに殺し合ったりしないので、恐れる必要はないと言った。さらに、501のために通行許可証を発行し、便宜を図ってあげた。後に、彼が歴史反革命と判断されると、子供が巻き添えを食らうのを恐れて妻と偽装離婚し、P県にいる全ての国民党分子のことを全部はつきりと自白したので、501は彼が功績を立てたと考えて、最後に彼を守った。

四類分子

- ・四類分子は強制労働をさせられ、汚れる仕事や苦しい仕事を全てやったが、村の道を掃除するのが主だった。彼等は、毎朝、区分けして掃除し、治保主任が検査した。レンガ造りの穴倉の残滓を片付けるなどのつらい仕事もあった。また、群衆大会を招集して四類分子を糾弾した。例えば、歴史反革命のCASは学校で糾弾されたが、本村の糾弾は決して激しくなかった。

奮闘団

- ・土地改革の時、閻錫山の決死隊は上級の許可を得ずに人を縛り上げて殺した。この奮闘団はただP県だけにあつて、他の地方にはなかった。その中の戦士はみな反革命だった。土地改革の時、本村では2人を射殺した。1人は地主(幼名は豆子)で、もう1人は富農(WLG)だった。主要な理由は、土地改革で彼等の財産を分配したが、彼等が反撃して奪い返す

と見なされたので、鎮圧されたからだった。

王蕃について

・WFは閩錫山の特務の親玉で、以前は兄弟2人で長工をやっていたが、後にアヘンを売買して財をなし、土地改革中に富農と判定された。かつてはテレビを用いて敵の放送局(当時は通敵工具と呼んでいた)を搜索したが、公安内部でその処分に対する意見が分かれ、敵の放送局を切断すればよいと考える者と通敵工具は没収されるべきだと考える者がいて、結局は、WFのテレビは没収されてその後もずっと返還されなかった。この他にも、WFは支部書記のWXHを買取しようと企てたり、糾弾大会で大笑いし出すと、WXRは彼が辱め笑っていると考えたので、ずっと矯正する機会を与えず、彼を審査に合格させなかった。このことに対して、WFはWXRのことを気に入らなく思い、自分が歴史反革命であることは認めしたが、走資派であるとは認めなかった。そして、彼はただ家長のみにレットテルを貼るべきで、家族の者にはレットテルを貼るべきではないと思っていた。「723布告」後に名誉が回復した。

V 常利兵・高維娜による聞き取り

(1) WYX(1947年生まれの亥年、64歳)

聞き取り日時：2010年7月23日 9：40～

聞き取り場所：某氏宅

整 理：高維娜・常利兵

WYXの家族

・解放初期、私の家は中農とされ、40～50畝の土地があったが、食べ物が不足し、食糧を出すことができなかった。これは自分の家の管理がよくなかったからである。私の父は、若い時、外地で兵隊になったことがあり、後に特務の暴露によって日本人に捕まえられて太原に監禁され、解放後になってやっと本村に戻ってきた。共産党は、一時、私の父を謀反

人と見なしたので、本村に帰ってきてから身分がなく、共産党の飯にはありつけなかった。

衣食住

- ・以前、本村の主要な食べ物は高粱と玉蜀黍で、西葫芦(ナタウリ)・白菜・大根・粟も食べた。公共食堂の時期は、朝、1人当たり1個の饅頭か窩頭を分配された。1958年はまだお腹いっぱい食べることができたが、1959年から1960年には村に食べるものがなくなり、多くの人が餓死した。1961年には状況が好転してきた。

文革期の状況

- ・本村の紅衛兵は総司と聯絡站の両派に分かれ、私は総司派に参加した。参加の動機は、騒ぎに乗じて大勢の中に入って何かをしようと考えたことと生産隊の中に功績を記録として残すためだった。紅衛兵の組織の中では、「頭」は直接には武闘に参加せず、主に「幹将」が突撃した。運動中は、貧農が優先され、中濃は団結する対象だったが、重視はされなかった。両派の闘争に対して、大部分の人は熱心ではなく、自分の考えをちゃんと持っている人はあまり参加しなかった。この種の運動は、村の中では县城の中ほど激しくはなかった。

人民公社の労働時間

- ・夏は、普通、朝5時半か6時に畑に行行って働き、8時には戻って朝ご飯を食べ、9時頃また畑へ行行って働き、午後1時頃に戻って昼ご飯を食べる。昼食後、少し休憩し、午後3時か4時に再び畑に行行って働き、暗くなって見えなくなったら、仕事を終えて戻る。
- ・冬は、朝8時頃、畑に行行って地ならしをし、農地の水利建設を行い、仕事は多くないので、午後1時か2時には戻って再び畑へ出かけることはない。
- ・夏は1日10点(女性は8点)の労働点数を稼ぎ、冬は1日6.5点の労働点数を稼いだ。

農閑期の生活

- ・ 昼は働き、夜は会議が開催された。以前、私は生産隊の副隊長を務めていたが、生産の按配や上級の支持を伝えるために会議は必要だった。
- ・ 冬の暇な時は、女性は靴を作ったり、家の中を片付けたりし、また、男性は自分の家の自留地を整理したりした。

(2) LYZ・GSC(ともに1948年生まれの子年, 63歳)

聞き取り日時：2010年7月23日 10:40~11:30

聞き取り場所：GSC宅

整 理：高維娜・常利兵

毛沢東思想宣伝隊

- ・ 毛沢東思想宣伝隊は1966年に成立した。生産大隊は、学校で勉強したことがなく、やることもなく、文芸を愛好する若者を組織し、晩に演目を練習し、毛沢東思想や「農業は大寨に学ぶ」などを宣伝した。全部で30人余りいて、女性が多く、大部分は18~19歳の未婚者だった。みんなやることがないので、楽しみを目当てに参加した。私(LYZ)と夫のGSCはともに高級小学校を卒業し、12~13歳でP人民劇団娃娃班に参加し、2人とも文芸が好きだったので、宣伝隊に参加した。
- ・ 宣伝隊の演目の内容は主に毛沢東語録の宣伝だったが、後には「沙家浜」や「白毛女」などの演劇の稽古もした。演劇の演出はTYCの弟のTFCがやった。道具や衣装は借り物だった。
- ・ 宣伝隊の上演は、非公式なものから公式なものへ移行する過程を経て、宣伝隊員に対する政治的要求もますます高まっていった。宣伝隊の活動は4~5年間に集中していた。結婚したり、働かなければならなくなると時間がなくなったりしたので、1971~72年頃には解散した。私(LYZ)も結婚して子供が生まれると、子供の世話や家事などで忙しくなり、文芸活動をしに行く気力がなくなった。

集団化

- ・間違っただけを言うとは、学習班に入らなければならなかった。普通の社員は物を盗んでも一般的には批判闘争にかけられなかったが、レットルを貼られた者が物を盗めば批判闘争にかけられた。集団化から個別経営に戻るのには自然の成り行きだったが、集団化時代にも良いところはあった。

(3) WSQ・WJZ(ともに1928年生まれ辰年、83歳)

聞き取り日時：2010年7月23日 16:20～

聞き取り場所：WSQ宅

整 理：高維娜・常利兵

童養媳

- ・かつて本村にはSLという2人の娘がいたが、その父母がアヘンを吸っていてアヘンを買うお金がなくなったので、この2人の娘を童養媳として売った。1950年に婚姻法が公布されると、この2人の娘は離婚して、それぞれ本村のGZLとTBYと再婚し、今年、2人は78歳になった。

結婚

- ・WSQは1952年に結婚した。当時の結納金は40円で、2担の小麦(当時、小麦1担はほぼ20円)で支払った。その他に、玉の腕輪・3着の衣装・2足の布靴なども用意した。花嫁を迎えに行く時、H村で輿を担ぐ人2人を雇い、新郎と新婦がそれぞれ1台の輿に乗った。新婦は本村の人間だったので、輿に乗って村中を練り歩いた。また、ラッパは吹いたり太鼓をたたいたりする者がいたが、歌は歌われなかった。宴席には親戚や友人が0.3～0.5元の祝儀を持ってきた。
- ・WJZは1955年に結婚した。結納の品は2着の衣装と2足の布靴だった。花嫁を迎えに行く時、生産大隊の馬車を使った。集団のものなので、お金がいらなかった。当時、ラッパを吹いたり太鼓をたたいたりする者はいなかった。花嫁の家に新婦を迎えに行って自分の叔父の家に戻ってきた(WJZは7歳の時に両親が死去したため、その後はずっと叔父の家に住

んでいた)。戻ってから自分の家でご飯を作って食べたが、親戚や友人には知らせなかったので、親戚や友人は来なかった。結婚の手続きをしたのは本村秘書のWHだった。

WSQの個人史と家族

- ・私は、15～16歳の時に勘定台で店員として働いたが、18歳の時に二戦区の閻錫山部隊で砲兵となった。当時は、閻錫山部隊が本村を支配して「兵農合一」政策を実施していたので、もし兵隊にならなければ、食糧の補給を受けられなかった。私の家は食糧を出せなかったので、兵隊になるしかなかった。1948年、北営での一戦で閻錫山部隊が惨敗すると、私はすぐに本村に戻った。本村に戻ってから、私は民兵の営長となり、本村の土地改革に参加した。私は、車を護送する責任者として車で地主の家から財産を現在の供銷社のあるところまで運び、その後は門番と保管員となった。これらの没収財産は後に土地改革の成果としてみんなに分配された。
- ・私には2男3女の子供がいる。次男は向かい側に住んでいて左官をやっており、1日で90元を稼ぐこともある。

土地改革

- ・本村は1948年の解放に続いて土地改革が実施されたが、土地改革工作隊が村に入って来た時、銃は身につけていなかった。1949年に第1回目の土地改革の精算すなわち第二次土地改革が行われた。当時の政策では、1人平均4畝の土地が中農の標準だった。WSQとWJZは2人とも下層中農に区分されたが、WZZの家は200～300瀬の土地を所有し、長工もいたので、地主に区分された。

王受勤の労働

- ・私は、かつて第9小隊と第5小隊の隊長を務めた。毎日、朝早く起きて、社員に呼びかけて畑での労働に参加させた。社員は畑に行くと、隊長に任務を分配され、仕事が終わった後で、隊長が検査して労働点数を記録した。後に、「包工」(労働請負)というやり方が採用され、管理がやや容

易になった。

文化と娯楽

- ・1950年代からたまに村に巡回の映画放映隊がやって来るようになった。当時の映画は「南征北戦」や「小兵張嘎」などで、無料と有料(映画の鑑賞券は1枚0.5元)のものがあるが、村では金がなくて映画を見られない者もいた。1960～70年代は、毛沢東思想宣伝隊の演目を見た。
- ・1982～83年頃、WSQが音頭をとって、WJS・WZH・WJと4人で劇団を組織し、WSQが団長になった。事前に生産大隊に連絡していたので、生産大隊が部屋を提供してくれた。劇団は100人以上の学生を招集して1人から1ヶ月につき3元の学費を徴収した。沁源県や武郷県などでも上演したことがある。1年余りしてから劇団を解散し、道具などを全部で4,000円で売った。
- ・祝祭日には、「紅火」(主に銅鑼や太鼓を打ち鳴らしたり、ラッパを吹いたり、楽器を演奏したり、歌ったり、高足踊りを踊ったりする)で大騒ぎした。「紅火」の隊伍は各家に行って紙煙草やお金をあげた。紙煙草はみんなで分け合って吸い、お金は生産隊に残しておいて道具を買った。文革期になると、みんなデモや武闘をやったので、「紅火」で大騒ぎさせなかった。最近では、村外の人を雇って「紅火」が行われている。

WJZの軍歴

- ・私は1948年に解放軍に入隊し、戦場で負傷した(現在、1年に8,000元の年金を受け取っている)。本村に戻ってからは、私も民兵になった。

(4) JST

聞き取り日時：2010年7月24日 9：50～

聞き取り場所：JST宅

整 理：高維娜・常利兵

家族

- ・祖父のJDZは、1866年生まれの実年で、1947年、閩錫山の部隊が共産党と関連する者を捕まえて28人を殺したが、孫のJSXがゲリラ隊員だったので、圧力に押されて井戸に飛び込んで自殺した。82歳だった。
- ・父のJSXは、1893年生まれの実年で、1960年に逝去した。長年、寧夏で卸売りの商売をしていたが、1950年に本村に戻ってきて農民になった。

JSTの個人史

- ・1950年、寧夏から戻ってきてX村で教師になり、1953年から平定県の中等師範学校で勉強し、1955年から孝義県で働いた。1972年、P県に戻り、人民公社の秘書になり、後に寧固県で退職を迎えた。

解放前の状況

- ・小さい頃は、高粱・玉蜀黍・粟を食べた。地主の家では小麦粉を食べていた。長工は緑豆や高粱を食べていた。

土地改革

- ・1948年旧暦6月6日、P県が解放された。閩錫山が「兵農合一」政策を実施して「国民兵」と「常備兵」がいて村の土地が全て混乱していたので、1948年冬の土地改革は順調には進まなかった。本村では1949年になってようやく本当の土地改革が始まった。本村には11戸の地主がいた。1950年には土地改革の再検査が行われ、私の家は貧農に区分された(この時期、本人は寧夏で勉強していて本村にはいなかったから、自ら経験したことでなく、後に学習したことであろう。－翻訳者による注釈)。

結婚

- ・1951年12月に結婚した。花嫁を迎えに行く時、H村の輿を使い、B村から乗せて戻ってきた。当時、まだラッパは吹いたり太鼓をたたいたりする者がいたが、人民公社時代にはあまりラッパを吹かせないようにしていた。

集市

- ・本村から20里離れたW県徐家鎮、本村から3里離れたN郷(2月8日)、本村から6里離れたW家庄でも定期市が開かれた(前掲の3.(1)JSTをも合わせて参照されたい。－翻訳者による注釈)。

(5) WC(1930年生まれの午年, 81歳)

聞き取り日時：2010年7月24日午後

聞き取り場所：老爺廟前

整 理：常利兵・高維娜

家族

- ・父のWQR(3男)は、WHR・WHR・WDRの4人兄弟だった。WHRにはWLとWYの2人の子供がいて、WHRには1人息子のWLがいたが、会ったことがない。
- ・父のWQRには、私を含めて4男3女の子供がいる。長男がWZ、次男がWL、3男が私、4男がWD(69歳)である。3人の姉妹はそれぞれ太原・介休・W家庄に嫁いだ。

WYについて

- ・WYは、抗日戦争時代に本村でP県城のWYJと結婚し、息子1人と娘1人が生まれたが、解放後、北京に行ってまだ結婚していないと嘘をついて18歳年下のTXと結婚した。本村に残っていたWYJは子供を連れて北京へWYを探しに行った。ところが、WYはWYJと子供のことを知らないと言い、WYJと結婚したことも認めなかった。そこで、WYJは法廷に行ってWYを告訴したが、法廷はWYとWYJの間に婚姻関係は存在せず、WYとTXの間の婚姻の事実を認めるという判決を下した。その後、WYJはかつて家族で撮った集合写真を証拠として、再度、北京の法廷に告訴し、自分がWYの元妻であることとWYが毎月の生活費を自ら持つてくることを認めさせた。
- ・1986年頃に本村に帰ってきて、1989年12月17日に逝去した。

W家の祖先

- ・W家の祖先は、安徽省からやって来たWSL・WSG・WSYの3人兄弟である。洪洞県の大槐樹の時代から始まってすでに690年が経過し、本村では27代続いており、現在、8世代が生きている。私は20世代目である。
- ・2003年、私が先頭に立って村党支部に祖先を祀ることを申請し、2005年までの3年間、祭祀を行った。2005年に祠堂の修復を願い出たが、今に至るも返答がない。

注

- 1) 拙稿「華北農村訪問調査報告(1)－2007年12月, 山西省太原市・霍州市農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)－2008年12月, 山西省太原市・霍州市・平遙県農村」(北陸史学会『北陸史学』第57号, 2010年7月)・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月, 山西省P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号, 2011年2月)・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年8月, 山西省P県の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第2号, 2011年3月)。
- 2) 日本側については、内山雅生・三谷孝・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(1)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第11号, 2010年12月)と田中比呂志「華北農村訪問調査報告(1)－2009年12月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』62集, 2011年1月)を参照されたい。他方、中国側については、行龍・郝平・常利兵・馬維強・李嘎・張永平(弁納才一訳)「山西省農村調査報告(1)－2009年12月, P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号, 2011年2月)を参照されたい。